

岩手県大槌町 医師会災害医療チーム（JMAT）に参加して

Vol.9



（第10次派遣隊）

活動期間：平成23年6月5～8日

支援場所：岩手県大槌町 岩手県立大槌高校救護所

参加メンバー：

中嶋 優太 薬剤師（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局弥生）

板澤 雅人 薬剤師（有限会社フラッシュ テルス調剤薬局）

工藤 源造 総務担当（株式会社町田アンド町田商会 福祉サービス課課長）

八木橋 郁夫 総務担当（株式会社町田アンド町田商会 農事営業部主任）

野崎 一也 総務担当（株式会社町田アンド町田商会 福祉サービス課主任）

避難所の状況

株式会社町田アンド町田商会の薬剤師らが医師会災害医療チーム（JMAT）の活動に同行しておよそ1か月。いよいよ今回の派遣が最後となる。また、大槌高校救護所で活動していた青森県JMATも6月10日をもって撤退する。

現在も大きな変化はないが、避難者数は230名弱に減り、6月8日には仮設住宅入居希望の抽選があったようだ。入居が決まった方への説明が15日にあり、抽選結果によっては避難者数が更に減る。しかしながら、仮設住宅は大槌町が希望している数のまだ半分しか完成していないようだ。

更に隣の釜石市は義援金の支給が始まっているようだが、大槌町は手続きの話すらまだないという。仮設住宅に入居後の水道、光熱費などは最初から自己負担になり、義援金がない状況では入居が決まったとしても手を挙げて喜べないというジレンマがあるようだ。

避難所の閉鎖には仮設住宅の建築と義援金の支給が急務である。



気温の上昇に伴い、体育館内の室内温度が30℃以上になり、空気がよどんでいる。窓を開放しようとしても、外気の臭いや虫が気になるなどの意見があり、なかなか実行できていないようだ。プライバシーを守るパーテーションやカーテンも、ここでは閉鎖的空間を作ってしまう、通気の足かせになる。高校側でも体育館の窓に網戸を設置するように検討しているが、その膨大な数と特注しなければならないという問題があり難しい。今後更に気温が高くなってきたときの熱中症にも注意が必要である。

救護所内でのボランティアスタッフとその取り組み

JMAT 青森県チームは医師、看護師、理学療法士、管理栄養士で構成され、カルテ作成、問診、診察、処方、救護所外処方箋の発行などの診察室内業務から、体育館ではリハビリ、集団体操指導、調理場や救護所外での食事内容調査、食中毒に対する取り組みを行った。

JMAT に参加した弊社薬剤師と総務は、調剤投薬業務、処方設計支援、救護所閉鎖を見据えた撤収準備作業を行った。その他、



セルフメディケーションの支援、一般用医薬品（OTC）の有効利用、地元の医療機関情報提供、公衆衛生の改善に向けた取り組みも行った。

高校の保健室に設けられた救護所は、診療時間が9時から11時半、13時から16時までで、診療終了後も救急患者の対応を行った。毎日開催から月水金に変更となった釜石市で開催される災害対策本部カンファレンスに参加した。

医療チームの宿泊場所は、避難所高校内に借り受けた特別教室1室であり、そこで寝食を共にする。



この他、愛知県保健師チームは計6人で構成され、大槌高校避難所を拠点に、近隣の避難所をまわり、避難者の容態確認、血圧測定、病院への受診勧奨などの支援を行っている。遠野市に生活の拠点を置き、毎日通っている。

これらのメンバーに避難所の代表の方を加え、8時40分より診療前カンファレンスを行う。刻々と変わる状況や避難者のニーズ、次々と浮かび上がる問題点を皆で協力して支援していくための重要な時間となった。

今回は食中毒や感染症予防に向けた取り組み、個別のケアが必要と思われる患者の情報交換、医療チーム撤退に向けた撤収作業などに関して皆で協力して取り組んだ。

食中毒防止に向けた取り組み

避難所の食事は朝昼夕の1日3回、質、量ともに十分であり、調理専門の方が衛生環境の整った調理場で調理にあたっている。

しかし、配膳は居住空間となる体育館内で行われているため、配膳場所の衛生環境によっては食中毒発生が心配される。



そんな中、今回一緒に活動した管理栄養士より配膳場所の下に敷いていた段ボールが不衛生であると指摘があった。体育館の床を汚したくない、傷をつけたくないとの理由から、当初から敷いていたようだが、1度も取り替えられた形跡がなく、汚れが目立っていた。段ボールは一見綺麗そうに思えるが、①汚れを吸収してしまう、②掃除しにくい、③虫やその卵が潜んでいる可能性があるとの理由から、食品を扱う環境では使用を避けるべきであるとのことだった。

衛生環境の悪化は食中毒に直結する可能性があり、早急な対応が必要であると考えた。医師や避難所代表の方に説明し、直ちに消毒薬の調整、段ボールの撤去、消毒を行った。やはり、汚れがひどく、湿り気を帯び、虫や大量のほこりが確認できた。

配膳台の天板や脚も消毒薬で清拭し、今後は、配膳台と床の清掃を配膳の都度行うよう避難者をお願いした。

避難者からは「この汚れている床の上での配膳が正直不安だった」「いつか、誰かがやらないといけな」とい思いながらそのままになっていたのが助かった」といった声が聞かれ、この活動が有意義なものであったと実感した。



調理にあたっている人たちの食中毒に対する意識は高いように思えた。米飯は自衛隊から届けられ、すぐに使用するようだが、牛乳やヨーグルトなどの乳製品、鶏卵などは廊下で常温で保管されていた。今まではさほど問題にならなかったことが、気温の上昇で状況も変わる。冷蔵スペースには限りがあり、本当に冷蔵が必要なものを入れてしまうと、どうしても後回しになってしまうものがあるということだった。250人分の食材の保管は思ったより難しい状況だ。

今まで栄養バランスを考え、飽きのこないメニュー作りに腐心してきた調理担当者を讃えつつ、牛乳を朝食メニューにすることにこだわらず、届いてすぐの食事に提供するなど、臨機応変に対応することも必要ではないかと提案した。

さらに、牛乳ではなく、冷蔵スペースが少なくて済むチーズなどで乳製品を補うこともできるのではと提案した。

また、炊き出しが行われるときも注意が必要である。ほこりや虫が多く、水道・流し場がない屋外、不慣れな環境での調理になってしまう。そのため洗浄が不十分だったり、生ものに火が十分に通っていなかったり、大人数の調理という事で作り置きしてしまうなど様々な問題が考えられる。

避難所代表の方に相談し、炊き出しボランティア代表者との打ち合わせの際には、予め注意点を説明し、善意を無駄にしないためにも、衛生的な調理を意識してもらうことを提案した。撤退後も食中毒を未然に防ぎ暑い夏を乗り切ってほしい。

プールの消毒

公衆衛生の改善に向けた取り組みの一つにプールの消毒があげられる。大槌高校避難所では、室内プールを避難者に解放し、洗濯機が設置され、プールサイドの至るところに洗濯物が干されていた。一見自由に洗濯ができ、避難者にメリットがある環境に思えるが、このプールに溜まったままの水が問題となった。気温の上昇により自然発生的に虫が増加しており、プールの水にもボウフラが発生していた。室内という蒸し暑い環境、不衛生な水が今回の大量発生に拍車をかけ、避難者の洗濯した衣服にもボウフラが大量に付着していたという。



食中毒や感染症の発生が懸念される中、感染症の媒体となる害虫の発生は大きな問題となりかねない。この度の震災でプールの排水機能が故障し、その修理が入るまでは10日以上かかり、修理終了後も排水に3日、水を張るのに7日間かかるということだった。医師に状況を説明し、早急に対応することにした。



抵抗力低下が懸念される避難者や、中・高校生が多数いる環境下での問題であり、公衆衛生上、早急な対応が必要であることを校長先生に説明したところ、在庫してあった消毒薬の使用を快諾していただいた。学校関係者の協力の下、



暫定的な消毒を終え、プールの水は臭いが少なくなり、ある程度の透明度を取り戻した。今後の害虫の大量発生防止に貢献できたのではないだろうか。

OTC の相談配布

支援物資として提供された OTC を「我々がいかに有効に使用するか。また、避難者に今後いかに安全かつ有効に使用してもらうか」が当初よりの課題だった。

第 9 次派遣隊から処方薬に OTC をセットにして（風邪の処方に市販のうがい薬、トローチ、栄養剤などをつけて）、また軽度の症状であれば OTC のみで対応する（もちろん医師の了承のもと）という方法に取り組み、薬剤師として OTC を有効に使用できたと思われる。

しかし、診察に伴って提供できるものは総合感冒薬、栄養剤、トローチやうがい薬、鎮痛剤の外用などに限られ、どうしてもまだ大量の OTC が余ってしまう。残っている OTC を、今後避難者だけで有効に使用してもらえるかという問題については最後まで良い案が見つからなかった。

避難所代表者に在庫管理の負担を強いたり、余剰分を避難所に無責任に残したり、このまま廃棄処分されたりすることのないように、相談配布することを決意した。

避難所に出向きマイクでアナウンスしたところ、直後に希望者が殺到した。基本は症状を確認しながら薬を選び、症状の改善が見られない場合は早急に医療機関を受診すること、また薬の相談は弊社の 24 時間対応フリーダイヤルに連絡いただくようにした。総合感冒薬、胃腸薬、解熱鎮痛剤、外用剤などの需要が高く、1 時間経たずにすべての OTC の配布が終わった。

これまで薬の相談をされると、診療を再開した開業医を受診すること、軽度であれば近くのドラッグストアを利用するように促してきた。しかし、大槌町は義援金の問題が一番大きいようだ。一見すると環境が良くて、避難所全体の雰囲気も良い。しかし、薬に限らず何か配るとなると雰囲気が一変する。「あれもほしい」「もっとくれ」など必死になっていた。もらえるものはもらっておきたいという考えに至るのは仕方ないことなのかもしれない。

青森 JMAT 撤退に向けた撤収についての取り組み

いよいよ我々の次のチームをもって大槌高校避難所の救護所は閉鎖する。次の JMAT チームには薬剤師の同行がないとのことで、薬関係は必要最小限を残し、撤収しやすいように板澤薬剤師、総務担当と協力しながら取り組んだ。

学校側から、撤収の際には貸していた教室の復元までを手伝ってほしいとの要望があった。3 か月近くこちらの要望を聞いてもらっていることもあり、医師の了解の下で快諾し、我々が次の JMAT チームに引き継ぐ際には学校関係者も立ち合ってもらうように提案した。

釜石災害対策本部に確認したところ、10 日の撤収作業の実施時刻が決まっていないとの事だったので、決まり次第学校側に連絡を入れるようお願いした。診察室として利用していた保健室は撤退の日に復元まで行うので、釜石対策本部が撤収しに来るまでは、保管室として使用していた空き教室 1 室だけはしばらく貸してもらえるように学校側の許可を取った。

手がついていない医薬品類は運びやすいように段ボールに詰め、ガムテープで留め、重ねてまとめておいた。

大槌高校の協力があってこそ避難者はある程度の環境で生活できていたと思うし、我々も無事任務を遂行できたと思う。大槌高校の多大なご理解とご協力に感謝したい。



総務の重要性



第1次からこれまで、安定した医療活動、充実した支援活動が出来たのは、毎回同行した総務のバックアップがあったからと言っても過言ではない。医師をはじめとする医療チームスタッフ、我々薬剤師が業務に専念できるように、食事の準備、買い出し、生活環境の整備を担当した。更に、移動するための運転手となり、行動記録としての撮影業務、物品、金銭面の管理、弊社派遣本部への定時連絡など、かなりのボ

リ्यूームをこなしてくれた。これら全てをスタッフ間でこなさなければならぬ
いとなると、本来の医療支援業務が疎かになるという感は否定できない。また、
ここで生まれた余裕が、医療チームとの
良好なコミュニケーションの構築につな
がり、充実した活動ができたと考えられ
る。

遠方への派遣、慣れない環境での活動
において、総務の存在意義を実感する今
回の災害支援派遣活動でもあった。



おわりに

5月3日から青森県JMATの活動に同行してはや1ヶ月。我々の活動も今回の派遣
をもって終了となりました。避難所の方々とは顔なじみになった方も多く、「今
まで本当にありがとう」「わざわざ遠いところから、長い間ご苦労様」など労
いのお言葉を頂きました。また、撤退する日が近づくにつれて、「寂しくなる」
「急にいなくなると不安だ」などのお声も頂きました。いよいよ引き上げの際
はわざわざお見送りに来てくれる方がいて、涙を流してくれる方もいました。



これは決して長い時間を過ごし
てきたための寂しさだけではなく、医療活動やそれ以外の様々
な取り組み、「被災者のための
支援活動」が実を結んだ結果で
はないかと思います。今までの
我々の活動が、避難所で生活し
ている彼らの健康的な生活に少
しでも貢献できたとしたら、医
療従事者として本当に嬉しく思
います。

今までの災害支援活動を通して、私が思ったことです。

- ① 刻々と変わるニーズを把握し、我々薬剤師がなすべきことがなんであるかを
考え、柔軟に対応することが必要である。
- ② 地域薬局 (Community Pharmacy) の薬剤師 (Community Pharmacist) として、

常に薬剤師の視点をもって問題点を見つけ、とにかくフットワークを軽く、積極的に行動することが必要である。

- ③ 医師の診察、医療スタッフが各分野において十分に専門性を発揮できるように、薬剤師が医療チームに積極的に参加することが必要である。
- ④ この災害から多くを学び、風化させないこと。

ここ津軽の地でも何らかの災害が起きた際は、医療従事者や様々な災害支援者と手を取り合い、スムーズかつ効果的な医療現場の構築、住民の健康的な生活の支援が出来ればと考えております。

謝辞

今回のJMAT活動でも医師、看護師、保健師等多くの専門職、災害支援者のご協力を得て、被災地での医療活動はもちろん、地域医療体制の構築、避難所の公衆衛生の改善に向け、微力ながら薬剤師としての役割を果たすことが出来たのではないかと思います。より一層、薬剤師としてのスキルを高めることが必要だと感じている次第です。これも白戸医師はじめ記念病院チーム並びに災害支援ボランティアの方々のご理解とご協力の賜物であったと心より感謝申し上げます。



JMATに同行したこのおよそ一か月、我々株式会社町田アンド町田商会の薬剤師は、大槌町の災害支援活動に参加する機会を頂き、通常業務にはない様々な貴重な経験をさせていただくことが出来ました。中村医師はじめ青森県医師会の皆様、同行させていただいた全ての青森県JMATの皆様の協力に、最後の薬剤師チームの隊長として心より感謝申し上げます。

また、町田社長をはじめ株式会社町田アンド町田商会全社員の後方支援が何よりの安心で、直接参加できない皆さんの分までと強い気持ちをもって活動に臨むことができました。長きにわたり、本当にありがとうございました。

最後に、今回の災害支援活動にお力添えをいただいたすべての皆様に心より感謝するとともに、厚く御礼を申し上げます。

以上